

梅酒作ろう●久永草太

電池切れ間際の時計の秒針が七時のあたりでうたた寝をする
塩辛き一日だった水撒けば今この虹の作者はわたし

遠浅の海へ向って投げる貝 言葉にしたって伝わるもんか
ガラス瓶ひとつ落として床の上散らかる星座に触れてはならぬ
病名がつかない程度に曲がりいて我が脊柱はかなしき木立ち
米炊けば米の匂いす魚炊けばまして腹減るいい炊事は

悪役にされちまつたなあちこ鯛の目玉ほじれば洞穴のあく
そりやそうさ口が命の部首だから食べてゆく他ないんだ今日も
待つことのできる僕らがなせる業 梅酒作ろう秋ごろ飲もう
カンニングのごと隣家を見て決める明るく曇る今日の部屋干し
体温計挿したき尻を見せられる狛犬二頭の間を過ぎる

銀色のナット落ちいてこの街のどこかで困っているドラえもん
やじるべえみたいいな笑みと両の手の梅一キ口と梅一キ口と
水たまりちよんちよん越えるこの道はときどき人を雀に化かす
この春に吸い上げたものでできている梅の産毛の先の先まで
まだ途中だと言いながら描いていて泳いでみたしその人の海
梅の実を百十九個拭きあげるひとつひとつが未来を孕む
鯉のごとき大きな口へ焼酎を注いで梅酒瓶のかなしさ

手の甲に青ペンの染み忘れたくなかったなにかの癩痕として
人という字の支え合い思いつつ背中に湿布貼られておりぬ